

三輪

世阿弥作

前

ワキ 玄賓僧都

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 三輪明神

地は 大和

季は 秋

ワキ詞

「是は和州三輪の山陰に住居する。玄賓と申す沙門にて候。さても此程何くともなく女性一人。毎日程闕伽の水を汲みて来り候。今日も来りて候はゞ。如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。

シテ次第

「三輪の山本道もなし。く。檜原の奥を尋ねん。

サシ

「実にや老少不定とて。世の中々に身は残り。幾春秋をか送りけん。あさましや成す事なくて徒に。憂き年月を三輪の里に。住居する女にて候。

詞

「又此山陰に玄賓僧都とて。貴き人の御入り候ふ程に。いつも程闕伽の水を汲みて参らせ候。今日もまた参らばやと思ひ候。

ワキ

「山頭には夜孤輪の月を戴き。洞口には朝一片の雲を吐く。山田もるそほづの身こそ悲しけれ。秋はてぬれば訪ふ人もなし。

シテ詞

「如何に此菴室の内へ案内申し候はん。

ワキ詞

「案内申さんとはいつても来れる人か。

シテ「山影門に入つて推せども出でず。

ワキ「月光地に敷いて掃へども又生ず。

二人「鳥声とこしなへにして。老生と静かなる山居。

下歌地

「柴の編戸を押し開き。かくしも尋ね切櫓。罪を助けてたび給へ。

上歌

「秋寒き窓の内。く。軒の松風うちしぐれ。木の葉かきしく庭の面。門は葎や閉ぢつらん。下樋の水音も。苔に聞えて静かなる。此山住ぞ淋しき。

シテ詞

「如何に上人に申すべき事の候。秋も夜寒になり候へば。御衣を一重賜はり候へ。

ワキ詞

「易き間の事此衣を参らせ候ふべし。

シテ

「あら有難や候。さらば御暇申し候はん。

ワキ詞

「暫く。さてく御身は何くに住む人ぞ。

シテ

「妾が住家は三輪の里。山本近き所なり。其上我菴は。三輪の山本恋しくはとはよみたれども。何しに我をば訪ひ給ふべき。なほも不審に思し召さば。

とぶらひきませ。

地「杉立てる門をしるしにて。尋ね給へと言ひ捨てゝ。

かき消す如くに失せにけり。(中入)

ワキ歌

「此草菴を立ち出でゝ。く。行けば程なく三輪の里。近きあたりか山陰の。松はしるしもなかりけり。杉村ばかり立つなる。神垣は何くなるらん。く。」

ワキ

「不思議やな是なる杉の二本を見れば。有りつる女

人に与へつる衣の懸かりたるぞや。寄りて見れば衣の褙に金色の文字すわれり。讀みて見れば歌なり。三つの輪は清く淨きぞ唐衣。くると思ふな取ると思はじ。

後ジテ

「千早振る。神も願ひの有る故に。人の値遇に逢ふぞうれしき。

ワキ

「不思議やな是なる杉の木陰より。妙なる御声の聞えさせ給ふぞや。願はくは末世の衆生の願ひをか

なへ。御姿をまみえおはしませと。念願深き感涙に。墨の衣を濡らすぞや。

シテ「恥かしながら我姿。上人にまみえ申すべし。罪を助けてたび給へ。

ワキ「いや罪科は人間にあり。是は妙なる神道の。

シテ「衆生済度の方便なるを。

ワキ「暫し迷ひの。

シテ「人心や。

地「女姿と三輪の神。く。釋掛帶引きかへて。唯祝

子が着すなる。烏帽子狩衣もすその上に掛け。御影あらたに見え給ふ。かたじけなの御事や。

地クリ「夫れ神代の昔物語は。末代の衆生の為め。済度方便の事業。品々以て世の為めなり。

シテサシ「中にも此敷島は。人敬つて神力増す。

地「五濁の塵に交はり。しばし心は足引の。大和の国に年久しき。夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿。

変はらぬ色を頼みけるに。

クセ「されども此人。夜は来れども昼見えず。ある夜の睦言に。御身如何なる故により。かく年月を送る身の。昼をば何と烏羽玉の。夜ならで通ひ給はぬは。いと不審多き事なり。唯同じくはとこしなへに。契りをこむべしと有りしかば。彼人答へ云ふやう。実にも姿は羽束師の。漏りてよそこにや知られなん。今より後は通ふまじ。契りも今宵ばかりなん。今より後は通ふまじ。契りも今宵ばかりなん。」

りなりと。懇に語れば。さすが別れの悲しさに。帰る所を知らんとて。苧環に針をつけ。裳裾に之を閉ぢつけて。跡をひかへて慕ひ行く。

シテ「まだ青柳の糸長く。」

地「結ぶや早玉の。おのが力にさゝがにの。糸くり返し行く程に。此山本の神垣や。杉の下枝に留りたり。こはそもあさましや。契りし人の姿か。其糸の三わけ残りしより。三輪のしるしの過ぎし世を。」

語るに付けて恥かしや。

ロンギ地

「実に有難き御相好。聞くにつけても法の道。猶しも頼む心かな。

シテ

「とても神代の物語。委しくいざや顕はし。彼上人を慰めん。

地

「先は岩戸の其初め。隠れし神を出ださんとて。八百万の神遊び。是ぞ神楽の始めなる。

シテ

「ちはやぶる。 (神楽)

ワカ

「天の岩戸を引き立てゝ。

地

「神は跡なく入り給へば。常闇の世と早なりぬ。

シテ

「八百万の神たち。岩戸の前にて之を歎き。神楽を奏して舞ひ給へば。

地

「天照大神其時に。岩戸を少し開き給へば。又常闇の雲晴れて。日月光り輝けば。人の面白々と見ゆる。

シテ

「面白やと神の御声の。

地 「妙なる始めの物語り。」

地 思へば伊勢と三輪の神。く。一体分身の御事。

今更何と岩倉や。其関の戸の夜も明け。かく有難
き夢の告。覚むるや名残なるらん。く。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著